

別府の伝説

ひじり
聖の念力

故堀 藤吉郎

大蛇を退治した祐公和尚

動物園や菊人形で有名な楽天地の台地に龍源山吉祥寺がある。室町時代は、六坊並び立ち法燈かがやく聖地として栄え、大寺とはして充分の貫禄を示していた。今の

梁天地の地域は当寺の僧坊の跡であるという。

この吉祥寺跡地は、大友八代氏時の塔や昌華祐公和尚の開山塔や、供養のために建立した宝篋印塔などが現存している史蹟である。

この付近一帯の地名を音原(乙原)と称するのは、飛瀑の岩石を打つ音が聞こえるので付けられた名前であるといわれる。

吉祥寺の裏手の細道を登ると乙原の滝にでる。この滝は水源を船原山の山中に発し、二瀑二条にかかって滝壺に落下している。滝の横の断崖は役の行者や仁聞菩薩の修練を行なった所であるともいわれ、英彦山の山伏等の修験道場にもなった時代があった。

昔、この乙原の滝壺に雌雄の大蛇が滝の主として棲息していた。里人は非常に恐れて滝壺から出てこれないようにならざるにわざわざ竜王神を祀っていた。それにもかかわらず夜な夜な大蛇は乙原の里に出ては人をさらひ、家畜を喰ひ、田畑の作物を荒らすことが続いた。百姓達は「こんな恐ろしいことが毎夜続けばこの里から何も出来ずわらは餓死をしてしまふ。」と大擧して国主大友氏時に訴

えて大蛇を退治することを哀願したのであった。

この願いが再三に及んだので、国主氏時は家来を呼び集めて、

「皆の者よく聞け、我が領地乙原の里には夜な夜な大蛇が現われて、良民を苦しめ家畜を奪ひ田畑を荒らすことおびたしい。一騎当千の勇士あらば大友家の名譽にかけて彼の妖怪を討取り里人の憂いを断て。」と厳命した。

この命をうけて屈強の武士は、「我こそ大蛇を討取らん」と我れ先にと乙原の谷に入ったが、かえって大蛇の毒氣をうけほうほうの体で逃げ帰ってしまった。氏時は、「不甲斐なき奴共」と憤慨していた時に、幸いにも鎌倉より豪僧で新知識として名高い昌華祐公和尚が豊後に下向して来た。氏時は、一日居城に招じ事情を話し、法力によって大蛇を退治することを願った。和尚は、

「民百姓の難渋を救うためなれば拙僧の役目、ひとつ退治てみましようかな」と請け負った。

夜のくるのを待って昌華祐公和尚は单身乙原の滝壺に至り、一心不乱に法華經を誦読しはじめた。經の読み進

むほどに、力の加わるほどに滝壺の水は逆巻きはじめた。ややして雌雄二頭の大蛇が滝壺より姿を現し、目を怒らせ炎のような舌をペロペロ和尚を呑み込もうとしたが、法華經の功力にはかなわず苦しさのあまり体をのたうち廻り煩々として死んでしまった。

祐公和尚念被観音力によって大蛇を退治したという法力の噂は豊後一円に拡まり、和尚の教えを乞うために集まる信者は夥しい数であったという。

五穀成就万民快樂を本懐とした祐公和尚の徳を敬って帰依した大友氏は、乙原の地に大蛇にちなんで龍源山吉祥寺を創建して和尚にあたえ、当寺の開山としたといわれる。寺宝として和尚が退治した大蛇の頭骨を寺に納めていたが、今では浜崎家に保存している。昔は、この骨を削って飲めば腹痛に効き目があるといつて寺に乞い飲んだといわれる。氏時の塔も和尚の墓も浜崎家の庭内にある。

鬼をとじ込めた役の行者

楽天地の上手にそびえる立石山は、別名振旗山と呼び別府の大観峯ともいわれている。この山の山頂に大立石がある。方五間、高さ三間の巨巖石が三重に立倚って屹立している。これをメンヒルと称している。東に面するほうには線彫りの顔面像がある。ここは聖武天皇の神龜年間に行基菩薩の開いた温泉寺の一遺蹟であるといわれ、故鳥居龍藏博士は先史時代の磐境（いわさか）即ちストーンサークルであると旧別府史誌に発表されている。

この山の北麓一帯は古より朝見郷立石邑たかしと称されていた。その頂上に立石があることから呼ばれた地名で、頂上からの展望は実に雄大である。

昔、頂上の大石を朝見郷の人々は石神様と崇めて、旱天のつづく年などは巨火をかざしてこの石神様に雨乞いの祈念をすると大雨沛然として降ったといひ伝えられているが、一名鬼とじ石とも呼ばれ、この山を鬼とじ山ともいっている。

役の行者は、舒命天皇の五年三月二十八日に大和の葛城郡天箱村に生まれた。幼名を小角といったが、乳を離れぬうちから言葉解したため恐れられて葛城山に捨て

られた。小角は、野獣になかで育ち十七歳の時に金剛山に登り十年余り苦行した。後に奥羽・中国・四国・九州の山々を護摩を修しながら遍歴して、六十八才で行方が知れずとなった修験道の大神を貫いた聖人である。

豊後路に足をふみ入れた行者は、乙原の滝の岸壁をよじ登り滝上の巖頭天狗岩に座して護摩を修業していた。その頃、この立石山に赤と青の鬼が住み夜な夜な出沒して里人を喰い殺し暴力のかぎりをふるうので、里人は何とか鬼どもを鎮めることが出来ないか鳩首会談を繰り返していた。この時ひとりの百姓が進み出て、「何でもこの頃、乙原の滝の天狗岩で修業をなすっているお方は役の行者様とかいってたいそう偉大な修験者というが、ひとつあのお方にお願ひしてみようではないか」。それがよからうということとで代表者が行者にお願ひした。枯れ木のような相貌をした行者も快く引き受けてくれたので村人は安堵の胸を撫で下ろした。

さて、役の行者が立石山に登っていくと、行者の行く手を阻むかのように行者の辺りだけに恐ろしい豪雨が降りそそいだ。行者が呪文を唱えると、どこからともなく

赤、青鬼があらわれたので、立ち所に神通力で頂上の大岩を手をかけ軽々と差し上げ鬼に投げつけると、二頭の鬼はこの大磐石の下じきになってしまった。その後鬼は再び姿を現さず山麓の村々は静かに明け暮れたということである。

そのためこの大岩を鬼とじ石、山を鬼とじ山と呼ぶようになったと言ひ伝えられている。明治十年発行の別府村誌には、鬼とじ山という名前で載せられている。

灼熱地獄を止めた空也上人

大昔、北石垣の石垣神社の付近には熱湯が噴出する大地獄があった。ところが、不思議なことに今ではこの付近には温泉もない。

天徳四年、空也上人は全国を行脚の途中別府にやって来て、とある石垣の寒村に足を踏み入れた。その地域には、もう々と湯煙が立昇り熱湯は辺り一面の稲田を洗っている。上人は、これは恐ろしい灼熱地獄じゃといって近寄ってみると、その凄まじいさは壯観というか壯絶と

いおうかたいへんな噴気である。百姓もこの地獄が噴いて以来、付近の田畑は作物として出来ぬ荒田になって困ったことだと悲嘆に暮れていた。

「それはお困りであろう。五穀が成就せねば生活の道もたたれてしまう。わしが法力を以てみ仏のお力を借りてしんぜよう」と地獄に向かって念珠をつまぐりお経を誦読したのであった。法力の加護は恐ろしいもので、さしもの灼熱地獄も立ち所に鎮まってしまったのである。

このことがあって、空也上人を生仏と尊敬した村人は安心立命の法の教えを乞うために、この付近に円通寺という寺を建てたので上人はしばらく滞留された。別府大学の辺りに廟所原という地名も残っているが、ここが円通寺の跡であろうといわれている。

石垣の村に滞留中は付近の村落を巡錫し仏陀の名号を唱えて歩き、水の無い村には井戸を掘り、春木川に橋を架け、荒廃した寺を修営するといった善根を施し衆生を濟度救恤したのであった。それで人々は空也上人のことを市上人とも呼んで崇め奉ったのである。空也上人はその後速見郡中に寺院七ヶ所建立の志願たてて、最後に建て

た寺を願が成就したという意味で願成就寺と名付けたといわれる。これが赤松の妙見様といわれる日出町の願成就寺のことである。

一遍上人が開いた鉄輪の蒸風呂

海岸の国道を亀川に向かって行くと上人が浜という名勝地がある。ここを一遍上人の上陸地と呼んでいる。

時は建治三年秋の盛り、羽室の丘から一帯にかけて山々の木々は紅葉し、田圃の稲も黄金の波を打っている。伊予の道後から遥々と一遍を乗せた船は、帆をはらまして今しもこの岬に近づいてきた。やがて船が岬の一角にかかると同時に一天にわかにかき曇り大嵐となった。その黒雲のなから恐ろしい形相をした大蛇が一疋、一遍を呑み込もうと真っ赤な口をあけて待ち構えている。船の舳先に立った上人は念珠をつまぐり南無阿弥陀仏を誦読し始めると不思議や大蛇は雲散霧消してしまった。

平田の浜に上陸して河直（鉄輪）につき阿鼻叫喚の大蛇を見て驚いた上人は、法華経を一字一石に書き綴り

地獄に投じて八丁四面に猛り狂う大地獄を鎮めてしまった。鉄輪の蒸風呂は残る噴気を利用して造られたものである。風呂のなかの石の配列は、その昔一遍上人が投じた二字一石がそのまま残ったといひ伝えられている。

国主の豊前豊後守護職従四位下出羽守大友頼泰は非常に信心深い武将であった。頼泰は一遍を館に招じた。この時一遍と法論を戦わせた浄土宗瑞光寺の僧真教は、時宗の教理に感銘し遊行宗（時宗）に改宗し第二祖となつて河直の温泉場を再三改修したといわれる。大友頼泰は鎌倉幕府に豊後凶田帳を差し出し、後に入道して法名を道忍と改めた人で、弘安八年、元寇の役の負傷者をここで療治した。

甘柿を红柿にした弘法大師

昔、城島高原一帯はただ一本の野道が通り、付近は森林に覆われた淋しい場所であった。

この村境をひとりの旅僧が錫杖を身にもたらしのまま落日の余光をまともに受けて旅やつれの顔。見渡すかき

り高原のうねり、倉木山や雨乞岳、城ヶ岳さては由布岳の秀麗な山々の波濤が紫色に染まっている景色を眺めてため息をついている。

「行けども行けども人里とてなさそうな」

これは今から千五十年ほど前の話して、人物は托鉢姿の弘法大師その人であり、時は秋の暮れ、

「下手に見えるあの煙は夕食の支度（やうしょく）の農家らしい、どれひとつ一夜の宿を頼んでみましょう」。

細道をおりその百姓家の前に立ち、

「道を間違えてか山道で難渋している者であるが、朝見の村里へ行くのにこんなに日が暮れかけては今夜中に着くことも難しかろう。一夜の宿をお願いしたい。」

「こんな山里の人氣のない暮らし、人様が懐かしゅうは存じますが何様病人のあること、朝見の村までは小一里ばかり、時刻は六つか六つ半（午後七時）には着くことでしょう、道もこれからは間違ひも起こるまい一本道です。お急ぎなされ。」

弘法大師の顔に憂いの色があらわれた。

「さよう御座るか。それでは朝見の村まで日の暮れ

西行法師と由布岳の怒り

ぬうちには急いでまいろう。見れば庭先の柿も豊作のよう枝もたわわで見事なものじゃ。話すのも気が引けることながら、拙僧、朝の食事をすませたものの昼から一物も腹に入らず空腹でもあるし、美しい柿の実一ツ二ツお恵みは願えないかな。」

農夫はこの乞食坊主といった顔つきで、

「おあいご用ですが、うちの柿はみな渋柿じゃで、渋柿を差し上げても却ってご迷惑、それより急ぎなされ朝見へ、由布のお山も黒ずんで来ましたじゃ日が暮れますぞ」

大師は重い足を曳いて朝見の村に着いたのは午後の八時ごろ、上畑の農家に一泊を乞い温かいもてなしを受けたのであった。

このことがあってから来る秋も来る秋も大師に宿をかさなかつた農家の甘柿は渋柿に変わってしまった。大師を冷たくあしらった鬼のような百姓がいたということがら後にこの部落を鬼島と呼ぶようになり、現在の城島の名がおこったのである。

豊前善光寺から円座の道を宇佐郡天間の部落へとひとりの旅僧が錫杖を突き立て突き立て詠歌の声も力強くやってくる。墨染の衣は長い旅を思わせるのかぼろぼろに破れている。天間の辻の一軒家、ここは少し高みになっていて麦畑のあちこちには菜の花が咲いている。流れの土手には桜の花も咲き、どこからか牛の声も聞こえてくるのどけさである。

今は春の盛りであろう。由布岳を真正面に眺める風光明媚の地である。一息入れようとするのか旅僧はとある農家の縁先を乞い一休みした。老婆のいれた渋茶を心地よげにひと飲みほし由布岳の端麗な姿に見入っている。かつて鎌倉から大空に聳える富士を仰いだことがあった。その時の心境であろうか、見入ったいるうちに興が湧いたか腰の矢立てを抜き懐紙に何やらしたためている。書きおわったらしい。山と紙とを半々に眺めながら口づさんだ。

豊国の由布の高根は富士に似て

雲も霞もわかぬなりけり

読みおわるや天の彼方に大きなうなりが生じた。由布の峯には大きな笠雲がかかり、程なく大地は振動して山の峯は裂け、火柱は飛散して黒雲は濛々とたち昇り、真つ赤にとろけた石は四散して恐ろしく、木々は大風のなかにおのき草はなびき伏すといった有様である。野良の人々は逃げまどい、泣き叫ぶ子供の姿は見るも哀れである。

「しまった。愚僧の歌が山神には気に入らぬらしい。富士の山に似たというのが気に入らぬと見える。どれ」
旅僧は筆を力一ぱい握りしめ、何やらまた書いている。その顔は真剣である。

駿河なる富士の高根は由布に似て

雲も霞もわかぬなりけり

由布に向かって大声を張り上げて詠み終わるや摩訶不思議

議、鳴動は立ち所に止み大風は静まり太古の姿に帰ってしまった。

「旅の御僧や、恐ろしいことでござっしやったのう」
老婆の言葉も終わらないうちに「慚愧慚悔六根罪障滅除煩惱滅除業障」旅僧は繰り返し繰り返し念仏を唱えている。

麓の村は天国のような春が戻ってきた。もう雲雀も空高く囀っている。こんなことがあって旅僧はこの天間の村に草庵を建て衆生済度に専念した。村人は生仏と崇め御教えを乞う善男善女は日に日に集まる有様である。里人はこの草庵を西行堂と呼んでいたという。